

連載：研究者になる！－第82回－

生存圏研究所・助教 田鶴 寿弥子



●ターニングポイントとなったカナダの自然

幼少の頃より、自然豊かな田舎でカエルや虫の鳴き声を聴きながら、空と山を毎日眺めて過ごしました。泥水や木の葉のにおいをかぐと、大好きだったおままごとのことが今でも鮮明に思い出されます。父が務めていた博物館には古い土器や遺物が並び、それを研究者が一つ一つ調べて歴史の側面が明らかになる、そんな行程が幼い自分にはとてもキラキラとした光景に映りました。自分の世界に浸るのが好きだった私ですが、小学生の時に両親が送り出してくれたカナダとアメリカへの体験留学は、自分にとって大きなターニングポイントとなりました。飛行機から見た初めての空と雄大なカナダの森林、そしてホームシックの両方に泣いたことを今でも覚えています。その頃から、自分が知らない世界を知りたい、飛び込んでいきたい、という気持ちが少しずつ芽生えてきたのかもしれませんが。高校時代を思い返すと、笑顔で楽しそうに物理学の実験をくりかえす恩師の姿と言葉が印象に残っています。京大を受けようかなと相談したとき、笑顔で思い切り背中を押してくれたのもその先生でした。京大へ入学後は、図書館や古本屋さんで見つけたいろんな本を読みあさりました。父の仕事の関係で実家にも膨大な書物が山積みになっていたからか、本の香りを嗅ぐと心が落ち着く、そんな大学生でした。古本屋さんで素敵な本を見つけては読みふけていたある日、古本に挟まれた古びた一枚の紙きれを見つけました。ドラマのようですが、そこには、【この本を手にした方へ】とあり、【やりたいことをやるべし】と書かれていました。分厚い本におそらく長い間挟まれていただろう、どこの誰かも知らない古の先人からのメッセージは、当時、壁にぶつかり悩んでいた私への大きなエールになりました。

●木を取り巻く世界に魅了されて

学部生のころ、当時の木質科学研究所（現：生存圏研究所）で、文化財の樹種を科学で調査する研究が行われていることを知り、扉をたたきました。シルクロードの遺物調査、歴史的建造物や木彫像の調査、新しい識別手法の開拓、年輪の同位体比研究など、木が教えてくれる幅広い情報に夢中になりました。なにより、顕微鏡でみる木材組織の美しさと複雑さに魅了されました。徐々に、木製文化財の樹種を科学的に調べることで、それにより日本やアジアの適所適材な用材観や歴史を解明する、という文理融合的な研究に魅了されていきました。そして今は、人々の信仰や宗教に関連しながらも、用材観へのアプローチがあまり進んでいない東アジア地域の木彫像や建造物などの文化財に注目し、データの蓄積と解析をすすめ、人間と木の関わりや日本文化ならびに東アジアにおける文化交流の歴史を紐解く研究等を行っています。日本の木彫像の用材には、大陸からの仏教や禅、陰陽道といった様々な文化が大きな影響を与えたと考えられますが、日本に比べて、近隣アジア諸国における木彫像の樹種情報についての体系的な研究は、まだ少ないのが現状です。そこで、アメリカのボストン美術館、フィラデルフィア美術館、クリーブランド美術館などと、東アジアの古い木彫像における樹種調査を行い、各国で異なる用材観について、美術史の研究者らとともに多角的に考察しています。最近、欧米の美術館に保管されていた神像の樹種調査から、国内外へ散逸してしまった神像群の発見につながる研究があり、美術史の研究者たちと大いに盛り上がっています。私の研究は、木を軸に、美術史、考古学、建築史、地球化学といった分野の研究者だけでなく、数寄屋大工、彫刻家といったプロフェッショナルな方たちともに行います。木を見て森を見ずとならないように、様々な木の専門家たちの言葉や教えをしっかり糧として、しなやかに大胆に、調和のとれた研究をすすめたと思っています。大好きな木やたくさんの人の手で守られてきた文化財と真摯に向き合い、若い世代や社会に、もっともっとおもしろいことを還元できるような研究をしたいと考えています。

●「母」も「好きな研究」も両方できる有難さを噛みしめて

仕事で海外に行く機会が増え、家庭や子供を持つ同じ立場の様々な国の女性研究者らとの関わりも増えました。日本に置いてきた幼い子ども達のことを毎日心配している私が言われたのは、「母親がいない間にこそ、子どもは何かを得て立派に育つのよ」という言葉でした。「子どもはもちろん大切だけれど、子どもには子どもの人生があり、母親の頑張りはずっと子どもに伝わる、あなたはあなた自身の人生を尊重しなさい。だから、ほらビール飲んで！」という励ましの言葉も。女性・男性関係なく、一人の人間として、自分の人生をいかに大切に生きるか、そのような観点からの言葉が、とても強く心に響きました。やはり共働きとはいえ、今の日本の社会構造ではまだまだ女性が家事育児、特に「名もなき家事」に費やす時間は長いように思います。自己嫌悪に陥ったりすることも多々ありますが、もとより私は完璧な女性（妻）ではなかったからと自分に言い聞かせて笑ってごまかすことにしています。疲れていても研究のことを考えるとウキウキし、「お仕事ががんばってね」と書かれた手紙を子どもから貰えるとニヤニヤするほどうれしいです。「母（妻）」も「好きな研究」も両方させてもらえるという有難さを噛みしめながら、今を大切に、支えてくれる家族、双方の両親、そして職場の人々に感謝しながら、一步一步大切に研究を続けていきたいです。